自己評価報告書（最終報告）

報告者	芸術系コース（美術）／小川勝

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1．目標・計画

①授業内容は、学校現場ですぐに役立つ教材を取り上げ、実戦可能なものとして展開する。②授業方法は、現場で自信を持って授業できるように、取り上げた教材を徹底的に掘り下げて、美術作品それ自体に加えて、その時代的背景なども検証してゆく。③教師として、対象の美術作品をどの程度深く理解しており、それをあらゆる側面から考察できるようになっているかを、評価の対象とする。

2．点検・評価

後期には、「初等中等教科教育実践Ⅰ」において、日常生活の関連性を重視した教材の開発に努め、具体的にはブリューゲルの『子供の遊戯』と『鳥獣戯画』を詳しく検討して、美術の中の遊びと、実際の遊びの比較して、美術の現実的な価値を重視した

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

今年度からは「初等中等教科教育実践」のⅠとⅢの主担当になるので、そこで基本的な教材を取り上げることで、受講者の実践能力を高めることになるだろう。それ以外の担当授業は例年どおりだが、これも、受講者が教員として将来にわたって長年持続的に自ら学ぶ姿勢が身に付くように、内容を吟味してゆく。学生生活支援では、昨年に引き続き、国際交流委員を担当し、また大学院入試委員も改めて担当するので、それを軸に、多方面にわたって努力したい。

2．点検・評価

後期においても、担当したそれぞれの授業で、教員として生涯にわたって学ぶ姿勢を体得できるように講義等を工夫した。学生生活支援では、国際交流委員会の副委員長として、多くの行事に参加して、役割を果たした。大学院入試委員会委員としても、必要な業務を遂行した。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

科研を申請しているが、それが採択された場合は、海外でのフィールド・ワークを中心にして、研究を展開することになるだろう。採択されなかった場合は、英語の論文を執筆すべく、蓄積してきた資料を精査し、できるだけ多くの機会に発表できるよう努力したい。

2．点検・評価

後期には、フランスで今後の現地調査のための予備調査を行い、遺跡の管理者と詳しく打ち合わせるなど、一定の成果を得、来年度以降の研究の進展の可能性を開くことができた。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

大学院入試委員として、また国際交流委員として、職務に精励し、またそのほかの問題に関しても、自発的にアプローチしたい。

2. 点検・評価

大学院入試委員会と国際交流委員会に所属しているが、特に後者では副委員長を務め、委員会の打ち合わせや学外の行事に本学を代表して出席するなど、、職務を果たした。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携，国際交流等

1. 目標・計画

附属学校とは、大学院の「教育実践フィールド研究」の担当者として、特に付属小学校と連絡を密にしてゆきたい。社会に対しては、講演などを行う機会もあるので、そこで、本学の教育研究に関しても、伝えたい。国際交流では、例年どおり、ユネスコ傘下のイコモス（国際記念物遺跡委員会）のメンバーとして、引き続き、専門の「岩面画」の分野で、海外の研究者とも連携を密にして、活動してゆきたい。

2. 点検・評価

附属小学校では「教育実践フィールド」の担当者として授業実践にまで至るように、担当教諭とも連絡を密にして、学生を指導することができた。
国際交流では、例年どおり、ユネスコ傘下のイコモス(国際記念物遺跡会議)のメンバーとして活動し、専門の「岩面画」の分野ではフランスのクロット博士とも面談して、今後の活動について議論した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）

12月には、京都で開催されたシンポジウムで招待発表するなど、本学の研究水準を示すべく奮闘した。